目　覚　め　た　頃 (※1)

高普第５回卒　佐藤　　富 (※2)

私は昭和 25 年に入学し 28 年に卒業した。相高での思い出は今でも尽きることがない。人に語るには値するものはないけれども指名されたからにはとりつくろうほかはない。

相高は非常に厳格な所だと私は思いこんでいて入学間もない頃はかなり身構えていた。級数の和の式の証明と幾何定理の証明で長谷川Ｂ (※3) 先生と熊耳 (※4) 先生から相次いで教わった帰納法とか帰謬法とかの論法には名称からしてなにやら難しく響くものを感じてなるほどこれが高校の授業かと感心した。

斎藤香 (※5) 先生が社会を担当されていて或る時「%」の意味を問われ何人かがあれこれ答えたがどれも先生には不満らしかった。そして「100 につき」という言葉を使わないとどんな事云っても正解にはしないときっぱりといわれた。この時期に端を発して以来後年長く続いていることがある。

英語の教科書には三省堂の検定本が使用された。その中のダーウイン自叙伝の一部「私の幼少年時代」に自分にはずいぶんよく似たところがあると思い上がって心の底から共感し完本を入手して自分と同じ歳までの長文を暗記した。私は著者を大偉人と敬っているので時折その文を暗誦してきたが今後これでボケの始まりがチェック出来るように思う。

同じ英教科書にハックスレーの「観察し記憶し比較せよ」という題の論文がありこの文も私の中に生きていて最近まで後輩達への檄の論旨としてきた。

あるとき解析数学の試験中に長谷川Ｂ先生がいつの間にか後ろから私の答案を覗かれていて「佐藤は女子大にも入れないぞ」とからかわれたことがあった。その日の問題のどれかは某女子大の入試問題だったらしかった。明記しておくが私はレッキとした男性である。

２年生の中頃旺文社発行の蛍雪時代という受験雑誌の模擬試験問題を見たところどの科目もほとんど解けずこんな問題を平気で解くのがいるのかと全国区のレベルの高さに驚き己の前途多難さを感じた。こうしたことから私は諸事に目覚めて行ったようである。

３年生のとき、私は校友会の運営にかかわったが、年度初めに或る運動部の予算がかなり前倒しに使用されていたことが判明してその部は活動不能の事態となった。予算は配付されるがそれはいわば借金の返済に当てられたのである。この問題では正直云ってずいぶん腹が立った。いつの時代でも扱いにくい若輩はいるもの、交友会役員の無能無策ぶりを書きなぐったビラがまかれて、名指しでケナされた。かくしてイモヅル式に私の記憶はたぐりよせられ、授業料が月 500 円、交友会費が 120 円、その問題の金額がしかじか、関係者がだれそれ等々、次第に鮮明となった。

そこであの面々はどうなったかなと馬城会名簿を繰ってみるとその若輩君も無事で老いていたので思わず微笑んでしまった。諸先生方、紅顔の学友諸君、朽ちかけていた校舎と青春の日々への愛着は尽きることがない。

(※１）記念誌『相中相高百年史』〈1998（平成 10）年７月発行〉の「思い出の記」より。

(※２）昭和 28（1953）年卒、中村出身。

(※３）長谷川清、昭和 21 年～昭和 48 年まで相馬高校に勤務。

(※４）熊耳　敏、相中第 46 回、昭和 22（1947）年卒、大甕出身。

(※５）昭和 25 年～昭和 39 年まで相馬高校に勤務。　　（ 転記&※脚注　村山 ）